

古墳とヤマト政権

日本列島では、政治連合が形成されるとともに、古墳^{こふん}がつくられるようになっていった。大和^{やまと}地方を中心としたヤマト政権は、大陸とも関わりながら、大王^{おおきみ}を中心とする集権的な国家形成を目指すようになる。ヤマト政権と古墳にはどのような関係があるのだろうか。また、ヤマト政権は大陸とどのような交渉をもったのだろうか。

5

1 古墳文化の展開

Q▶ 古墳の出現は何を意味すると考えられるだろうか。

① 古墳時代前期の早い段階で出現期という。この時期の古墳の中で最大の規模をもつものは、奈良県の箸墓^{はしむす}古墳である。出現期の古墳は、西日本では前方後円墳が多かったのに対し、東日本では前方後方墳が多い。

② 古墳が営まれた3世紀中頃から7世紀を古墳時代と呼び、これを古墳がもっとも大型化する中期を中心に、前期(3世紀中頃～4世紀後半)、中期(4世紀末～5世紀末)、後期(6～7世紀)に区分している。古墳時代後期のうち、前方後円墳がつくられなくなる7世紀を終末期(→p.32)と呼ぶこともある。古墳時代の終末期は、飛鳥^{あすか}に政治の中心があったことから飛鳥時代とも呼ぶ。

Q▶ 前方後円墳が、北海道・沖縄を除く日本列島各地に広がった背景として、どのようなことがあげられるだろうか。

古墳の出現とヤマト政権

弥生^{やよい}時代の後期には、すでに大きな墳丘^{ふんきゅう}をもつ墓が各地で営まれていたが、

3世紀中頃から後半になると、より大規模な前方後円墳^{ぜんほうこうえんふん}をはじめとする古墳が西日本を中心に出現した。これら出現期の古墳①は、多くは前方後円墳もしくは前方後方墳^{ぜんほうこうほうふん}で、長い木棺^{もっかん}を竖穴式石室^{たてあなしきせきしつ}におさめた埋葬施設や、多数の銅鏡^{どうきやう}をはじめとする呪術^{じゆじゆつ}的な副葬品^{ふくそうひん}をもつなど、画一的な特徴をもっていた。

古墳は各地の豪族^{こうぞく}たちの共通の意識のもとにつくり出された墓制で、その背景には古墳の出現に先だって広域の政治連合が形成されていたことが考えられる。出現期の古墳の中でもっとも規模が大きいものは、奈良県(大和)にみられ、この時期には大和^{やまと}地方を中心とする近畿中央部の勢力によって政治連合が形成されていた。この大和^{やまと}地方を中心とする政治連合をヤマト政権^{やまとせいけん}という。古墳は遅くとも4世紀の中頃までに東北地方南部にまで波及したが、これも東日本の広大な地域がヤマト政権に組み込まれたことを示している②。

前期・中期の古墳

古墳には、前方後円墳・前方後方墳^{ぜんほうこうほうふん}・円墳^{えんふん}・方墳^{ほうふん}など様々な墳形がみられる。数が多いのは円墳や方墳であるが、大規模

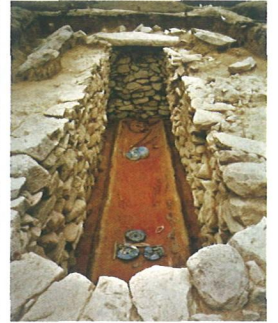


箸墓古墳 奈良県桜井市にあり、出現期の前方後円墳として、最大の規模をもつ。墳丘長は約280m。



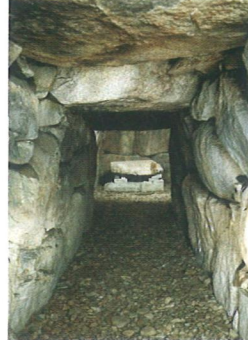
埴輪が並べられた古墳 埴丘は葺石でおおわれ、埴輪が並べられている。

(兵庫県五色 塚古墳、復元)



竪穴式石室 滋賀県雪野山古墳の石室。天井石を取り除いた状態である。

(東近江市埋蔵文化財センター)



横穴式石室 奈良県牧野古墳の石室を羨道からみる。玄室内には凝灰岩製の家形石棺をおさめる。

(奈良県立橿原考古学研究所)

な古墳はいずれも前方後円墳であり、各地の有力な豪族たちが採用した墳形であった^③。古墳の墳丘上には埴輪が並べられ、斜面は葺石でおおわれ、墳丘のまわりに濠をめぐらしたのも少なくない。

5 埴輪は、前期には田筒埴輪や家形埴輪、盾・靱・蓋などの器財埴輪が用いられた。

埋葬施設には、前期・中期は木棺や石棺を竪穴式石室におさめたものや棺を粘土でおおった粘土槨など竪穴系のものが営まれ、後期になると横穴式石室^④が多くなる。副葬品も、前期には鉄製の武器や農工具などとともに、三角縁神獣鏡^⑤をはじめとする多量の銅鏡や腕輪形石製品など呪術的・宗教的色彩の強いものが多く、この時期の古墳の被葬者である各地の豪族たちは司祭的な性格をもっていたことをうかがわせる。中期になると、副葬品の中に鉄製の武器・武具が多くなり、馬具なども加わって被葬者の武人的性格が強まったことを示している。

最大の規模をもつ古墳は、中期に造営された大阪府の大仙陵古墳(仁徳天皇陵古墳)で、墳丘の長さが486mあり、2～3重の周濠をめぐらしている。さらにそのまわりの従属的な小型の古墳である陪

③ 日本の古墳を墳丘の長さの順にあげると、上位46位まではすべて前方後円墳である。弥生時代後期になると、円形や方形の墳丘墓ではその周溝に陸橋部をもつものが現れるが、その陸橋部が発達して突出部(前方部)となり、前方後円墳や前方後方墳になったと考えられている。

④ 横穴式石室は、死者をおさめる墓室である玄室と、玄室と墳丘外部を結ぶ通路(羨道)をもち、追葬が可能なことが竪穴式の埋葬施設と異なる。中期の初め頃に朝鮮半島の影響を受けて九州北部に出現し、後期には日本の古墳の一般的な埋葬施設となった。

⑤ 邪馬台国が交渉した中国の三国時代の魏の鏡と考えられるが、中国から渡来した工人が倭でつくったという考えもある。



三角縁神獣鏡 周縁の断面形が三角形をしている。写真は奈良県黒塚古墳のもの。(径22.0cm、国(文化庁保管)、奈良県立橿原考古学研究所)

鉄製の武具 右は短甲と呼ばれ、上半身を防御する武具。左はかぶと。(姫路市教育委員会蔵、兵庫県)





大仙陵古墳(仁徳天皇陵古墳) 大阪府堺市の東部に展開する百舌鳥古墳群の盟主的位置を占める。(堺市)

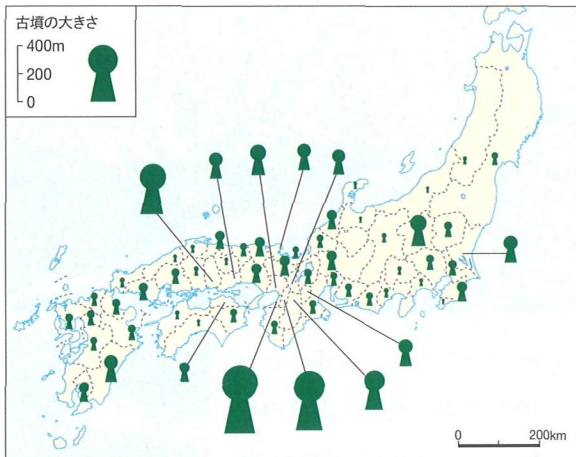
① 馬韓諸国では百済が、辰韓諸国では新羅が台頭したのに対し、弁韓と呼ばれた朝鮮半島南部の地域では4～6世紀になっても連合的な状態が続いた。それらの諸国を加耶と呼ぶ。『日本書紀』では加耶を「任那」と呼んでいる。

Q▶ 加耶諸国とヤマト政権とのあいだには、どのような関係があったのだろうか。

② 高句麗の都であった丸都(中国吉林省集安市)にある広開土王の事績を記した石碑で、碑文は当時の朝鮮半島情勢を知るための貴重な史料である。その中に「百残(百済)新羅は旧是属民なり。由来朝貢す。而るに倭、辛卯の年(391年)よりこのかた、海を渡りて百残を破り新羅を□□し、もて臣民と為す」とあり、その解釈が議論されている。



広開土王碑(高さ約6.4m)



古墳時代中期の大型前方後円墳 旧国別に古墳時代中期(5世紀)の最大規模の前方後円墳の大きさを示したものの。近畿地方を中心とする政治的な連合の中で、それぞれの地域の勢力が占めた位置を物語っている。

家^{ちやう}が営まれた区域をも含めると、その墓域は80haにもおよぶ。第2位の規模をもつ大阪府の誉田御廟山古墳(応神天皇陵古墳)などとともに、5世紀のヤマト政権の大王^{おおきみ(だいおう)}の墓と考えられる。

中期の巨大な前方後円墳は近畿中央部だけでなく、群馬県(上毛野)・京都府北部(丹後)・岡山県(吉備)・宮崎県(日向)などにもみられる。とくに岡山県の造山古墳は墳丘の長さが360mもあり、日本列島の古墳の中で第4位の規模をもつ。このことは、ヤマト政権と呼ばれる政治的な連合体において、これらの地域の豪族が重要な位置を占めていたことを示している。

東アジア諸国との交渉

中国では三国時代のあと晋が国内を統一したが、4世紀初めには北方の匈奴をはじめとする諸民族(五胡)の侵入を受けて南に移り、南北分裂の南北朝時代を迎えた。このため、周辺諸民族に対する中国の支配力は弱まり、東アジアの諸地域は国家形成へと進んだ。

中国東北部からおこった高句麗^{こうくり(668)}は、朝鮮半島北部に領土を広げ、313年には楽浪郡を滅ぼした。一方、朝鮮半島南部では馬韓・弁韓・辰韓というそれぞれ小国の連合が形成されていたが、4世紀には馬韓から百済^{ひやくさい(4世紀半ば～660)}が、辰韓から新羅^{しんら(4世紀半ば～935)}がおこり、国家を形成した。

朝鮮半島南部の鉄資源を確保するために、早くからかつての弁韓の地の加耶(加羅)諸国^{かや(から)→p.33}と密接な関係をもっていた倭(ヤマト政権)は、4世紀後半に高句麗が南下策を進めると、百済や加耶とともに高句麗と争うことになった。高句麗の広開土王(好太王)碑^{こうかいとおう(391～412)}の碑文には、倭



4～5世紀の東アジア

興死して弟武立つ。自ら使持節都督倭・百濟・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七國諸軍事東大將軍倭國王と称す。

順帝の昇明二年^①、使を遣^{しやう}して上表して曰く、「封國^②は偏遠にして、藩を外に作す。昔より祖^そ繼^{けい}の躬^{こう}から甲冑^{かうきゆう}を擯^はき、山川を跋^{はく}渉^{しやう}して密処^{みつこ}に違^なあらず^③。東は毛人^{もうじん}を征するこ^④と五十五國、西は衆夷^{しゆい}を服することと六十六國、渡りて海北^⑤を平^{たい}ぐることと九十五國……」と。詔して武を使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六國諸軍事東大將軍倭王に除す。

（宋書倭國伝、原漢文）

① 四七八年 ② 領域、自分の國のこと ③ 父兄といふ説と、武の祖父の珍（下図参照）を指すところと説とがある ④ 落ちついている暇もない ⑤ 蝦夷だけでなく東國の人々を呼んだのであらう ⑥ 西國の人々のことか ⑦ 朝鮮半島のことか

が高句麗と交戦したことが記されている。朝鮮半島から乗馬の風習を学び、5世紀になると日本列島の古墳にも馬具が副葬されるようになった。この間、倭は百済や加耶から様々な技術を学び、また多くの渡来人が海を渡って、多様な技術や文化を日本列島に伝えた。

さらに、朝鮮半島南部をめぐる外交・軍事上の立場を有利にするため、5世紀初めから約1世紀近くのあいだ、『^{そうじょ}宋書^{わこくでん}倭国伝^{さん}に讚^{ちん}・珍^{ちん}・濟^{せい}・興^{こう}・武^ぶと記された倭^{ごおう}の五王^{ごおう}が^{ちようこう}あいついで中国の南朝に朝貢している。

420 ~ 589

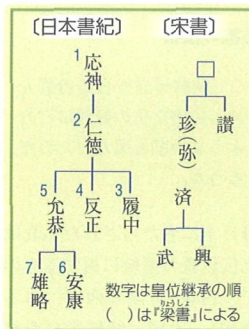
大陸文化の受容

このような朝鮮半島や中国との盛んな交渉の中で、より進んだ鉄器・須恵器^{すえき}の生産、機織り^{はたお}・

金属工芸・土木などの諸技術が、主として朝鮮半島からやってきた渡来人によって伝えられた⁴⁾。

ヤマト政権は渡来人を韓鍛冶部・陶作部・錦
こりべ くらつくりべ
 織部・鞍作部などと呼ばれる技術者集団に組織
 し、各地に居住させた。また、漢字の使用も始ま
り、埼玉県のいなりやま稲荷山古墳出土の鉄剣の銘文などに
おん
 見えるように、漢字の音を借りて倭の人の名や地
 名などを書き表すようになった。漢字を用いてヤ
 マト政権の様々な記録やすいとう外交文書などの作
 成に当たったのも、ふひと史部などと呼ばれる渡来人
 であった。

6世紀には百済から渡来した五経博士により



倭の五王と天皇

⑨『宋書』倭国伝に記されている倭の五王のうち、済とその子である興と武については『古事記』『日本書紀』にみられる允恭とその子の安康・雄略の各天皇に当てることにほとんど異論はないが、讃には応神・仁徳・履中天皇を当てる諸説があり、珍については仁徳・反正天皇を当てる2説がある。

4 『古事記』『日本書紀』には、
文筆や諸技術でヤマト政権を
支えたのちの西文氏・東
漢氏・秦氏の祖先とされる
王仁・阿知使主・弓月君ら
の渡来の説話が記されている。

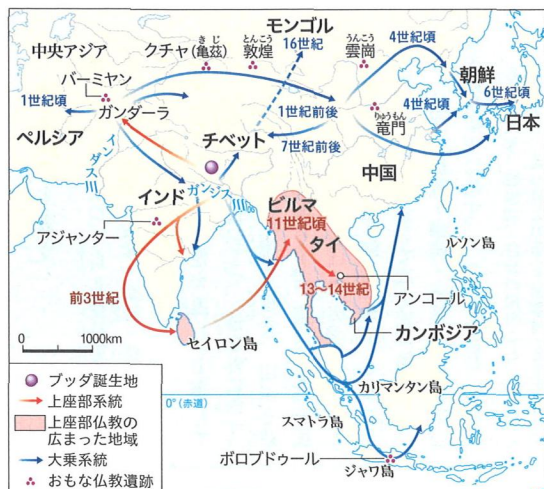
Q▶ 漢字や鉄などの大陸の文物の受容は、ヤマト政権の支配体制にどのような影響をおよぼしたのだろうか。



稲荷山古墳出土
鉄剣と銘文

(国〈文化庁保管〉、
埼玉県立さきたま史
跡の博物館)

和歌山県の隅田八幡神社の人物画像鏡の銘文のように、漢字の音を借りて地名などを書き表すこともできるようになった。



仏教の伝播

Q▶ 朝鮮半島からの渡来人は、古墳文化の発展にどのような役割を果たしたのだろうか。

① 日本にもたらされた仏教は、北伝仏教の系統に属するもので、西域(中国の西方にある地域)・中国・朝鮮半島を経て公式に伝えられた。百済の聖明王(聖王、明王とも)が欽明天皇の時に仏像・経論などを伝えたと言われるが、その年代については538年(『上宮聖徳法王帝説』)とする説と552年(『日本書紀』)とする説があり、前者の説が有力である。ただ渡来人のあいだでは、それ以前から信仰されていた可能性が高い。



埴輪 左は切妻造の家形埴輪(中期、高さ53.2cm、東京国立博物館蔵)、右は椅座の巫女の人物埴輪(後期、高さ69.5cm、東京国立博物館蔵)。



竹原古墳石室壁画
福岡県宮若市竹原古墳の横穴式石室の奥壁には、馬を引く人物や波形文の上に船などが描かれている。船や馬は、来世への乗りものとする説がある。
(宮若市教育委員会)

儒教が伝えられたほか、医・易・暦などの学術も支配者層に受け入れられ、仏教も朝鮮半島から伝えられた①。また、8世紀初めにできた歴史書である『古事記』『日本書紀』のものになった「帝紀」(大王の系譜を中心とする伝承)や「旧辞」(朝廷の伝承・説話)も、この頃にまとめられはじめたと考えられている。

後期の古墳

6世紀の古墳時代後期になると、古墳自体にも大きな変化が現れた。従来の堅穴系の埋葬施設にかわって朝鮮半島から伝わった横穴式石室が一般化し、新しい葬送儀礼にともなう多量の土器の副葬が始まった。また、墓室を丘陵や山の斜面に掘り込んだ横穴が各地に出現した。埴輪も人物埴輪・動物埴輪などの形象埴輪がさかんに用いられるようになる。古墳のまわりや墳丘上に並べられた人物埴輪・動物埴輪の群像は、葬送儀礼ないしは生前の首長が儀礼をとりおこなう様子を再現したものであろう。

そのほか九州北部の古墳には、石の埴輪である石人・石馬も立てられた。さらに九州各地や茨城県・福島県などでは、古墳や横穴の墓室に彩色あるいは線刻による壁画をもつ装飾古墳がつくられるなど、古墳の地域的特色が強くなった。

一方、5世紀後半から6世紀には古墳のあり方にも変化がみられる。近畿中央部では大規模な前方後円墳が依然として営まれたのに対し、それまで近畿について巨大な前方後円墳を営んだ吉備地方などで、大

きな古墳がみられなくなった。これは各地の豪族が連合して政権をつくるかたちから、大王を中心とした近畿地方の勢力に各地の豪族が服属するかたちへと、ヤマト政権の性格が大きく変化したことを示している。

ヤマト政権の変化と関連して、小型古墳の爆発的な増加があり、山間や小島にまで広く群集墳と呼ばれる小型古墳が数多く集まった古墳群が営まれるようになった。これは、古墳の造営など考えられなかった有力農民層までが、古墳をつくるようになったことの現れである。そして、本来は豪族層だけで構成されていたヤマト政権の身分制度に、新たに台頭してきた有力農民層を組み入れて、ヤマト政権が直接支配下におこうとしたものと考えられる。

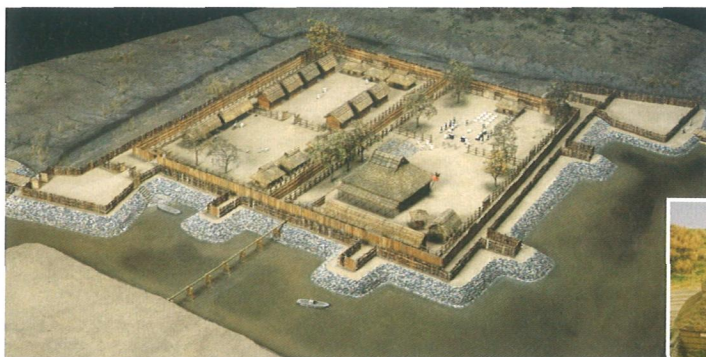
古墳時代の人々の生活

古墳時代は支配者である豪族と被支配者である民衆の生活がはっきり分離した時代でもあった。豪族は民衆の住む集落から離れた場所に、周囲に濠や柵列をめぐらした居館を営んだ。この居館は、豪族がまつりごとをとりおこなう場所で、また生活の場でもあった。さらに余剰生産物を蓄える倉庫群もおかれた。

民衆の住む集落には濠などはみられず、複数の竪穴住居と平地建物、



群集墳 奈良県新沢千塚古墳群。丘陵帯には約370基におよぶ大小様々な古墳が分布している。多くは、直径10～20m内外の円墳である。

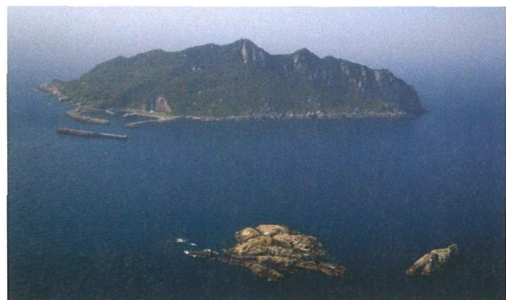


古墳時代の豪族居館 この時代、豪族は人々の住む集落から離れた場所に居館をかまえた。群馬県高崎市の三ツ寺Ⅰ遺跡は、5～6世紀の地方豪族の居館として最大級の遺跡。1辺約90mの方形の区画を幅30～40mの濠で囲み、その内側に川原石を積み上げている。

(推定復元模型、高崎市教育委員会蔵、かみつけの里博物館)

古墳時代の屋敷地 6世紀中頃の榛名山二ツ岳の噴火で噴出した軽石層の下から当時の集落が検出された。竪穴住居、複数の平地建物と高床倉庫などからなる屋敷がいくつか集まって1つの集落が構成されている。(群馬県黒井峯遺跡、復元模型、国立歴史民俗博物館蔵)





福岡県沖ノ島(上)と島内祭祀場の巨石群(右、模型) 玄界灘の沖ノ島からは、4世紀後半から9世紀にわたる各時期の豪華な奉獻品や大量の祭祀遺物が出土している。ここでは、日本列島と朝鮮半島とのあいだの海上交通の安全を祈る国家的な祭祀がおこなわれたと考えられている。

(模型：国立歴史民俗博物館蔵)



土師器(上)と須恵器(右)

土師器は古墳時代前期のつば壺(東京国立博物館蔵)、須恵器は古墳時代後期の脚付壺(豊田市郷土資料館蔵、愛知県)。

さらに高床倉庫^{たかゆかそうこ}などからなる基本単位(屋敷地)がいくつか集まって構成された。5世紀になると朝鮮半島の影響を受け、^{たてあな}竪穴住居の壁にカマドが設けられるようになった。

土器は、古墳時代前期から中期の初めまでは弥生土器の系譜を引く赤焼きの^{はじき}土師器が用いられたが、5世紀には朝鮮半島から硬質で灰色の^{すえき}須恵器の製作技術が伝えられ、土師器とともに用いられるようになった。衣服は、男性が衣と乗馬ズボン風の袴^{はかま}、女性が衣とスカート風の裳^もという上下にわかれたものが多かったようで、古墳の人物埴輪^{はにわ}に

表現されている。

農耕に関する祭祀^{さいし}は、古墳時代の人々にとってもっとも大切なものであり、なかでも豊作を祈る春の祈年^{ほうさくとしごい}の祭りや収穫を感謝する秋の新嘗^{にいなめ}の祭りは重要なものであった。

弥生時代の青銅製祭器^{せいどうせいさいき}にかわって、古墳の副葬品^{ふくそうひん}にもみられる銅鏡^{きやう}や鉄製の武器・農工具が重要な祭器になり、5世紀になると、それらの品々の模造品^{もぞうひん}を石などで大量につくって祭りに用いるようになった。

人々は、円錐形^{えんすい}の整った形の山や高い樹木、巨大な岩、絶海の孤島^{ぜっかい}、川の淵^{ふち}などを神のやどる所と考え、祭祀の対象とした。それらの中には、現在も残る神社につながるものもある①。

穢^{けが}れをはらい、災^{わざわ}いを免れるための禊^{みそぎ}や祓^{はらえ}、鹿の骨を焼いてそ

①三輪山を神体とし、拝殿のみで本殿のない奈良県大神神社や、玄界灘の孤島沖ノ島を神としてまつる福岡県宗像大社の沖津宮などでは、いずれも古墳時代の祭祀遺跡・祭祀遺物が発見されており、古墳時代以来の祭祀が続いていることが知られる。

の割れ目から吉凶^{きつきよう}を占う^{ふとまに}太占^{ふとまに}の法^{ふとまに}、さらに裁判に際して、熱湯に手
を入れさせ、手がただれるかどうかで真偽^{しんぎ}を判断する神判^{しんぱん}の盟神探湯^{めいじんたんとう}
などの呪術^{じゆじゆつ}的な風習もおこなわれた。

ヤマト政権と政治制度

5 5世紀後半から6世紀にかけて、大王^{おおきみ}を
中心としたヤマト政権は、東北地方南部
から九州におよぶ地方豪族^{ごうぞく}を含み込んだ支配体制を形成していった。
『宋書』倭国伝には、倭の五王が中国の南朝に朝貢^{てつけんめい}して倭王と認めら
れたことや、478年の倭王武の上表^{じやうひやうぶん}文^{ぶん}に、倭の王権が勢力を拡大し
て東・西・海北の地方豪族たちを服属させたという記事がみえる。そ
のことは、この時代の大規模な前方後円墳^{ぜんぽうこうえんふん}が近畿を中心として展開し
たことにもうかがえる。また、埼玉県の稲荷山古墳出土の鉄剣銘と熊本
県の江田船山古墳出土の鉄刀銘^{てつとうめい}には、ともに「獲加多支鹵大王^{わかつたけるおおきみ}」とい
う大王名が記され、その統治を助けた豪族名がそれぞれみられる。こ
の大王は倭王武であり、雄略天皇に当たる。

15 ヤマト政権は、5世紀から6世紀にかけて氏姓制度^{しせい}と呼ばれる支配
の仕組みをつくり上げていった。豪族たちは血縁やその他の政治的関
係をもとに構成された氏^{うじ}と呼ばれる組織に編成され、氏単位にヤマト
氏人を統率し、氏神の祭祀をつかさどる氏の首長を氏上^{うじのうへ}という。
政権の職務を分担し、大王は彼らに姓^{かバネ}（カバネ）^②を与えた。

中央の政治は臣姓^{おみむらじ}・連姓^{おのおみおのむらじ}の豪族から大臣^{おのおみ}・大連^{おのむらじ}が任じられてその
中^{ちゆうすう}枢^{しう}を担ったとされ、その下の伴造^{とものみやつこ}が、職務に奉仕する伴やそれ
を支える部^べと呼ばれる集団を率いて軍事・財政・祭祀・外交や文書行
政などの職掌^{しよくしやう}を分担した。また新しい知識・技術を伝えた渡来人^{とらいじん}た
ちも、伴造や伴に編成され、品部^{しなべ}の集団がそれを支えた。奈良盆地南
部には、大王の住む大王宮^{だいうきゆう}を中心に有力王族の皇子宮やヤマト政権
を構成する中央有力豪族の邸宅^{ていたく}が集中し、それぞれに中央の中小豪族、
地方豪族や伴などが奉仕していた。有力な豪族は、それぞれ私有地
である田荘^{たどころ}や私有民である部曲^{かきべ}を領有して、それらを経済的な基盤と
した。また氏や氏を構成する家々には、奴隸^{どれい}として所有されるヤツコ
(奴婢)がいた。

30 大王権力の拡大に対しては、地方豪族の抵抗もあった。とくに6世
紀初めには、新羅^{しらぎ}と結んで筑紫国^{つくしのくに}造^{みやつこ}磐井^{いはい}が大規模な戦乱をおこした。
(しんら)(ちくし)

Q 大王と中央・地方の豪族たちとのあいだでは、どのような関係が取り結ばれたのだろうか。

② カバネとしては、地名を氏の名とした近畿^{かざら}の葛城^き・平群^{へぐり}・蘇我^{そが}などの有力豪族に臣、職掌^{もの}を氏の名とした大伴^べ・物部^{ものべ}などの有力豪族に連、有力地方豪族^{きみ}に直^{あた}を与えた。カバネの実例としては、6世紀頃の島根県の岡田山1号墳出土^{たち}の大刀^{たち}の銘文^{めいぶん}にみられる「各田^{めいぶん}臣^{ねか}」(額田部臣^{ぬかたべのおみ})が古いとされる。



島根県岡田山1号墳出土の大刀 上半分を欠くが、「各田臣」(額田部臣)の文字などがある。(六所神社蔵)

大王軍はこの磐井の乱を2年がかりで制圧し、九州北部に屯倉を設けた。ヤマト政権はこうした地方豪族の抵抗を排しながら彼らを従属させ、列島各地に直轄領としての屯倉や、直轄民としての名代・子代の部を設けていった。6世紀には地方豪族は国造に任じられ、その地方の支配権をヤマト政権から保障される一方、大王のもとにその子女を舎人・采女として出仕させ、地方の特産物を貢進し、屯倉や名代・子代の部の管理をおこない、軍事行動にも参加するなどして、ヤマト政権に奉仕するようになった。

Q▶ 終末期の古墳の変化から、社会のどのような変化が読み取れるだろうか。

古墳の終末

6世紀末から7世紀初めになると、各地の有力な豪族たちが営んでいた前方後円墳の造営が終わる。各地でその時期がほぼそろっているのは、ヤマト政権による強力な規制の結果であろう。この時期、中国では隋が南北統一を果たし、朝鮮半島にも進出する姿勢を示していた。こうした東アジアの国際情勢の大きな変化から、倭も大王を中心とする中央集権的な国家形成を目指すようになり、古い豪族連合体制やその象徴である前方後円墳の造営と決別したと思われる。

前方後円墳の造営が停止されても、古墳の造営は100年間ほど続いた。考古学ではこの時期を古墳時代終末期、この時期の古墳を終末期古墳と呼んでいる。かつて前方後円墳を造営していた豪族層は大型の方墳や円墳を営むようになるが、地方でも国造に任じられた一部の有力な豪族らが大型の方墳や円墳を営んだ。

①終末期古墳としては最大の千葉県龍角寺岩屋古墳(方墳、1辺80m)や栃木県壬生車塚古墳(円墳、径80m)などは、国造に任じられた東国豪族が営んだものと考えられている。

さらに7世紀中頃になると、近畿の大王の墓が八角墳になった。これは大王にのみ固有の八角墳を営んで、一般の豪族層を超越した存在であることを墳墓のうえでも示そうとしたものであろう。その後も有力な豪族層はしばらく古墳の造営を続けるが、7世紀も終わり近くになると、彼らも顕著な古墳を営まなくなり、大王とその一族、さらにその支配を助けたごく一部の有力支配者層だけが、伝統的な墳丘をもつ古墳を営んだらしい。こうした前方後円墳の造営停止、大王墓の八角墳化、さらに有力豪族層の古墳造営の停止などは、まさに統一国家の形成から律令国家への動きに対応するものといえる。

2 飛鳥の朝廷

東アジアの動向とヤマト政権の発展

6世紀の朝鮮半島では、高

句麗の圧迫を受けた百済や

新羅が勢力を南に広げ、加耶諸国^②は562年までにつぎつぎに百済や

新羅の支配下に入った。そして、加耶と結びつきのあったヤマト政権

の朝鮮半島での影響力は後退した。6世紀初めの政治を主導した大伴

氏は、朝鮮半島への政策をめぐり勢力を失い^③、6世紀中頃には、

物部氏と新興の蘇我氏とが対立するようになった^④。蘇我氏は渡来

人と結んで朝廷(ヤマト政権の王権組織)の財政権を握り^⑤、政治機構

の整備や仏教の受容を積極的に進めた。

589年に中国で隋が南北朝を統一し、高句麗などの周辺地域に進出

しはじめると、東アジアは激動の時代を迎えた。倭では、大臣蘇我馬

子が587年に大連物部守屋を滅ぼし、592年には崇峻天皇を暗殺して

政治権力を握った。そして、敏達天皇の後であった推古天皇が新た

に即位し、国際的な緊張のもとで蘇我馬子や推古天皇の甥の厩戸王

(聖徳太子)らが協力して国家組織の形成を進めた。603年には冠位

十二階、翌604年には憲法十七条が定められた。冠位十二階は氏族

ではなく個人の才能・功績に対して冠位を与えることにより、氏族単

Q▶ 7世紀初めの国政改革には、どのような特徴があるだろうか。

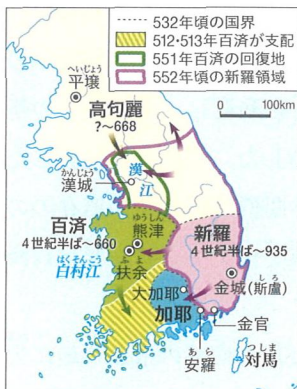
② 朝鮮半島南部の加耶は、前期は金官国(金海)、後期は大加耶国(高霊)を中心とした複数の国々による連合国家で、百済・新羅・倭などの諸国と外交関係を展開した。

欽明天皇の時代

③ 6世紀初めに、加耶西部の地域に対する百済の支配権が確立したことが失政とされ、大伴金村は失脚したという。

④ 先進文化とともに仏教の受容に積極的な蘇我氏と、伝統や在来の信仰を重んじる物部氏・中臣氏のあいだの戦いとなり、587年に物部氏を滅ぼした蘇我氏の権勢が確立した。

⑤ 王権の財物をおさめた蔵・内蔵・大蔵の三蔵を管理し、屯倉の経営にも関与したと伝えられる。



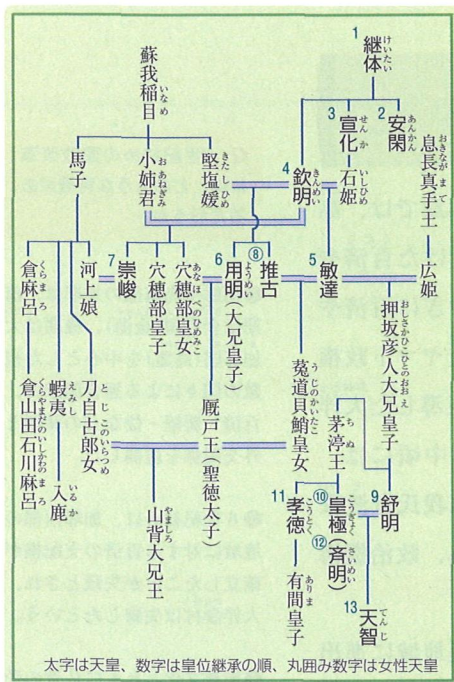
6世紀の朝鮮半島

読みといてみよう

憲法十七条はだれに向けて出されたのだろうか。また、なぜこのような性格の憲法が必要だったのだろうか。史料を読みとき、当時の内政・外交の状況をふまえて考えてみよう。

憲法十七条

一に曰く、和を以て貴しとなし、忤ふること無きを宗とせよ。
二に曰く、篤く三宝^①を敬へ。
三に曰く、詔^②を承りては必ず謹め。君をば則ち天とす、臣をば則ち地とす。
十二に曰く、国司・国造^③、百姓に教めたることなかれ。国に二の君なく、民に兩の主なし。率土の兆民^④、王を以て主とす。
十七に曰く、それ事は独り断るべからず。必ず衆と論ふべし。(「日本書紀」・原漢文)
① 仏教 ② 天皇の命令 ③ 税を不当にとる ④ すべての人民



天皇家と蘇我氏の関係系図

遣隋使の派遣

開皇二十年①、倭王あり、姓は阿每、字は多利思比孤②、阿輩難弥と号す。使を遣して闕に詣る。上③、所司をしてその風俗を訪わしむ。

(推古天皇十五年④)秋七月 戊申の朔 庚戌、大抵小野妹子を大唐に遣す。鞍作福利を以て通事⑤とす。〔日本書紀、原漢文〕

大業三年⑥、其の王多利思比孤、使⑦を遣して朝貢す。使者曰く、「聞くならく、海西の菩薩天子⑧、重ねて仏法を興すと。故に遣して朝拜せしめ、兼ねて沙門⑨數十人、来りて仏法を学ぶ」と。其の国書に曰く、「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙無きや、云云」と。帝、之を覽て悦ばず。鴻臚卿⑩に謂ひて曰く、「蛮夷の書、無礼なる有らば、復た以て聞する勿れ」と。

(『隋書』倭国伝、原漢文)

① 隋の文帝の年号、六〇〇年。② たらしひこ「足彦」は男性の天皇につけられる呼び名であるが、どの天皇を指すか不明。③ 文帝。④ 六〇七年。⑤ 通訳。⑥ 隋の煬帝の年号、六〇七年。⑦ 遣隋使小野妹子。⑧ 煬帝を指す。⑨ 僧侶。⑩ 外国に関する事務、朝貢のことなどを取り扱う官。

① 中国の歴史書である『隋書』によると、7世紀の倭には中国の牧宰(地方官)のような「軍尼」(クニ、国か)、里長のような「伊尼翼」(イナギ、稲置か)などの地方組織があり、10の伊尼翼が1つの軍尼に属していたという。

隋の皇帝煬帝は、翌年答礼使として裴世清を派遣した。

位の王権組織を再編成しようとしたものであり、憲法十七条も豪族たちに国家の官僚としての自覚を求めるとともに、**仏教**を新しい政治理念として重んじるものであった。こうして王権のもとに中央行政機構・地方組織①の編成が進められた。中国との外交も遣隋使の派遣により再開され、『隋書』にみえる600年の派遣に続けて**607年**には**小野妹子**が遣隋使として中国に渡った。この時の隋への国書は倭の五王時代とは異なり、中国皇帝に臣属しない形式をとり、**楊帝**から無礼とされた。

618年に隋が減んで**唐**がおこり、強大な帝国を築くと、倭は630年の**犬上 御田鍬**をはじめとして引き続き遣唐使を派遣し、東アジアの新しい動向に応じて中央集権体制の確立を目指した。遣隋使に同行した**高向玄理**・**南淵 請安**・**曇 首**の留学生・学問僧は、長期の滞在のち中国の制度・思想・文化についての新知識を伝えて7世紀半ば以降の政治に大きな影響を与えた。

飛鳥の朝廷と文化

6世紀末から、奈良盆地南部の飛鳥の地に大**王宮**(大王宮)がつぎつぎに営まれた。

有力な王族や中央豪族は大王宮とは別にそれぞれ邸宅をかまえていたが、大王宮が集中し、その近辺に王権の諸施設が整えられると、飛鳥

Q▶ 仏教はどのような人々によって、どのように受容されたのだろうか。



法隆寺の西院 金堂は1949(昭和24)年に火災にあい、壁画の大部分を焼損した。中門・金堂・五重塔・歩廊は飛鳥様式を伝えており、世界でもっとも古い木造建築の遺構という。(奈良県)



法隆寺玉虫厨子 檜製で黒漆塗りの厨子。透彫の金具の下に玉虫の羽が飾られる。宮殿部と須弥座の側面に仏教説話の絵画が描かれている。(高さ233cm、奈良県)

法隆寺千済観音像 樟の木像。「百済観音」の称は近代以降。長身のなで肩で水瓶をもち、崇高な印象を与える。

(高さ210.9cm、奈良県)



法隆寺金堂釈迦三尊像 須弥壇中央に安置された鞍作鳥作と伝える金銅像。北魏様式を受け、きびしくおごそかな表情をもつ。

(高さ86.4cm〔中尊〕、90.7cm〔左脇侍〕、92.4cm〔右脇侍〕、奈良県)



の地はしだいに都としての姿を示すようになり、本格的な宮都が営まれる段階へと進んだ。

7世紀前半に、蘇我氏や王族により広められた仏教中心の文化を飛鳥文化という。飛鳥文化は、渡来人の活躍もあって百済や高句麗^②、

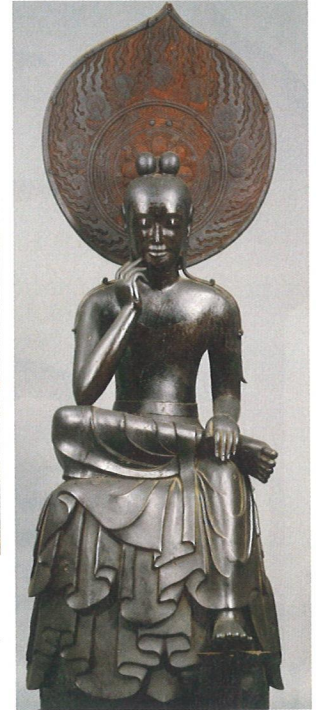
そして中国の南北朝時代の文化の影響を多く受け、当時の西アジア・インド・ギリシアともつながる特徴をもった。蘇我氏による飛鳥寺(法興寺)^③や、舒明天皇創建と伝える百済大寺、厩戸王創建といわ

^② 百済の僧曇首が暦法を、高句麗の僧曇徴が彩色・紙・墨の技法を伝えたという。

^③ 蘇我馬子は、はじめて塔・金堂などの本格的伽藍をもつ飛鳥寺を596年に完成させた。百済からの技術者が参加して、従来の掘立柱とは違い、礎石の上に柱を立てて屋根に瓦を葺く建築技法が用いられた。飛鳥寺の発掘では、塔の心礎から古墳の副葬品と同種の品が出土し、在来の信仰と習合しながら仏教を導入したことが知られた。



中宮寺天寿国繍帳 厩戸王の死後、妃の橘大郎女が厩戸王をしのんで刺繍させたものと伝えられる。(部分、奈良県)



中宮寺半跏思惟像 7世紀後半の樟の木像。片足を膝におき、片手を頬に当て思惟する姿で、慈愛に満ちた表情をもつ。中国南朝(梁)様式の影響が認められる。(高さ87.9cm、奈良県)

・法隆寺夢殿の救世観音像は秘仏で明治初期にフェノロサらの調査で初めて解明された。

①『日本書紀』には670年に法隆寺が焼失した記事があり、古い様式を伝える法隆寺の再建・非再建をめぐる論争があった。その後、創建時の法隆寺である若草伽藍跡の発掘によって、現在の金堂・五重塔などは焼失後に再建されたことがわかった。

・広隆寺は秦氏の氏寺である。
・中門・塔・金堂が一直線に並ぶ四天王寺式の伽藍配置である。

れる四天王寺・法隆寺(斑鳩寺)①などが建立され、寺院は古墳にかわって豪族の権威を示すものとなった。伽藍建築は、礎石・瓦を用いた新技法による大陸風の建物であった。仏像彫刻では、鞍作鳥の作といわれる金銅像の法隆寺金堂釈迦三尊像のように、整ったきびしい表情の中国南北朝の北魏様式を受容しているもののほか、やわらかい表情の中宮寺半跏思惟像・法隆寺百済観音像などの木像がある。また、工芸品では法隆寺玉虫厨子や中宮寺天寿国繍帳などが知られる。

・現在の法隆寺は中門から見て五重塔と金堂が並んで建てられている。
・法隆寺は現存する最古の木像建築物で、エンタシスの柱などに特徴がある。
・司馬達等の孫であり、止利仏師とも呼ばれる現存最古の仏像とされる飛鳥寺釈迦如来像も

第2章のまとめ

- 問1 古墳の形式や副葬品の変化と、日本列島の政治や社会の状況とは、どのようなつながりがあると考えられるだろうか。
- 問2 5世紀から7世紀にかけて、ヤマト政権と東アジアとの交流は、どのように変化し、日本列島の政治や文化にどのような影響を与えたのだろうか。